誹諧語類

蔵書

樂有齋龜友

標目

誹諧之大意并字義
百韻四十四歌仙等之法
懐紙之法并千句之式
賤物作例
七字天ホ遠葉并五義

以上五種

三世 自杜庵祇徳稿

宗祇曰誹諧者非レ道(テ)教道非レ心(ニ)道進正道也
立レ生(ニ)俳諧(ヲ)遊人と(ナ)るハ心をよくもつて
枝葉(ヲ)よく志(シ)誹諧俳諧(ヲ)論(ス)古今
まちくまちくして奥(ノ)深意(ノ)旨(ヲ)
もぬるとも用ひらるゝ(ニ)とゝいはれも
達門乃主(ノ)ゆへ(ニ)しかる(ニ)俳(ヲ)をもても用ゐる
わろ大やまと人も俳(ヲ)をも卑(シ)古学
をもとむるもの(ニ)て言(フ)ハ義(ヲ)究(メ)ていさゝの

此外之事者不可勝數
故不載焉
豪隱之滑稽猶俳諧
牌乃音也一變也
古人所以不是非之
心一也誹諧之字古今集之序
世中動ク哥ヲ撰集哈皆ナラン之ハ雲
治抄或說曰誹諧有二一俳諧二誹諧

三俳諧四滑稽五狂詩六謎字七空戲八歇後
九狂言云〻是をも皆ても足ハ人の爲也門
心もともみ犯すこと誹諧ハ然犯すみして心
も染ること有ハ林も心も犯す染
俗祇より心まなこと云ること祇て統ヲ上
李吟增山井四季之祖與出ても誹諧と二字
紀氏古今集之也ハ文字なれハ云爲

百韻等之法

一發句ハ百韻之初なれハこけるよく句也

一脇ハ發句ニ後を者ニ候ゆへ發句ニ對し候ものニ候

なる時ハ發句ニてもきこえ候ハ發句ニ對し候ものニ候

對句一ツ有之候ハ發句ニ對し候ものニ候

てもきこえしる文字ニ候ハ發句ニ對し候ものニ候

一脇ハ句切を四三とも三四とも三三四とも切るもの

一脇ニ發句ニ對し候ものニ候

ニ候ハ發句ニ對し候ものニ候

ニ候ハ發句ニ對し候ものニ候

ニ候ハ

和心乃くかくせぬるもこゝろみて
仕やうにて分ゝきるすべし
一文字の字畫も少三ふハけんなんせんなもの
一字なれハせぬるもこゝろ三ツ板名みてたゝねるも
服のやをかりてたゝおるうの有形に作る
一首より發句を服をさげ法
ことく少三を廣さとく〳〵服をたゝみ心
をそそるべし

一四句目ハかろくとさまる句も
と畫をそる但しかの
発句かろくせよとそのるこ
一五句目六句目七句目もろくとちをなをや
くみをくしかを入をてあらハるる句ハ
必不好ゝるこ
一八句目ハ打をろくとかろくさるものこ
月ハ發句より七句目迄よくてよし八句め

八句ひねり 但月雪ともに
出ひ八句めみて自然
花も
雪句服も三通り外を
八句めへ句め七句めまひ
四句月八句月み八句
名ゟ一ツ

一裏一つり乃句もなけ
ぬ通ゟ連寄み八
句ひねり

とも流儀ふいひむて
一九句月ともなひ有
一ぴ初折ゟもよ
いう松よを句もして
八句ひなゟ作者ゟ
一十三句月み七ゟ
八訳ゟめこ是も猶
いつゟゟ

一神祇尺

六

一九句月ともなひ有句八ぜぬもの
一ぴ初折ゟもよ
いう松よを句もしてもかやうなゟお通ゟ
八句ひなゟ作者ゟせひてゐくなゟ
一十三句月み七ゟ但是を定ゟゟ
八訳ゟめこ是も猶吟なれ八引上ゐゟ
いつゟゟ

執筆の事を生きん（
ふくらむ 初折乃句を
一一吟みいよ句を
ものし 折口俳句
一つよく人初心人
とも云ふて功者よ句数
き一唯一吟乃
も 俳諧も一てもの

一百韻乃句ふくりかり心ね乃ま初折ハな
つ作きもそえぬやうみをもくとて二折
ま作法をふひく人乃月をさ句させい
ま一吟折ハそ外ま句もいひて一點も二
悪も有のよふ名句おかろくと仕ま初ま
俳是ハ功者迄も自ゆふハ来ぬしそこの
うつり心を初ま句へまる

一月の句七つは内一ツ
いろ〳〵人初心乃〳〵なくさ
一花の句四つは内名ゆ
更ゆ是をおひのもと
てとろく後句の
めでたき句ひおもる
心ゆ一ツ称ゆ
一月け句ハ祝ゆ

不対うよをとりつぐ
挨拶を入ゐて
作ふるくもろ
うへめてくやう
百韻乃仕やう
なうよるもの
ちまち

懐紙之法

一面八句若句八字時節をたゝる景気
をゝのへて一作家あるへし一切字のたゝき
字一也過去ゟ一文字又ハふたぬなとふて
切字ゟ用心ゟ句初心ゟ多し牡丹ゟ有
へし又八功者ゟゝ人ゟ句ゟ試ハ大まハ
句切。心切。なといひてこうつて切ぬ句有
是なり切字ゟ句をゟぬるゟ多り
乃若句ゟ早き少ゟ遅き少なと八深ゟとた
ゟ居ゟ八極少ゟ景ゟ治定して有へし

一面八句ゟ神祇尺教恋ゟ述懐故人の名
名不用字ゟ始ゟ尺教恋ゟ述懐故人の名
尺ゟ恋ゟ春ゟ述懐ゟ雑名不用ゟ服ゟ花
七ゟ一ゟ二ゟ三ゟ四ゟ五句めゟ句めゟ七句めゟ
くゟもしぬゟ句めおゟ句ゟ服ゟ花ゟ
若心ゟ句ゟ式ハ

そ浅く根ハ深
それハ法宝乃心
なとゝなりとよハ
おもおもしけハ
小ゝてあつまるへし
見なとゝへて
ハぬんゝんゝ
てよゐるも式ハ

ゑ方おやねの
この花をおまのお
かゝのとく上よやま
七ゝおやのゝ
口合のや
切や
中のや
花や

おかゝん　貞徳
ゑ南
ゑぬゝん
をてよおゝとゝ
もゝ乃
ゝ
ゝ
ゝ

ハのや むさし野や 拾ふ草葉のおほくて
疑のや まちぬるやなぞや初しぐれ
すゝのや 野ぬやと人のいさめを聞いひて
以上七字 五文字乃
ハねやしハうめハ中のやし四つめハ角のやし
又五つめハハらやしおもひこ五つめ
気心そてこのうち
書をよまそて仕舞
十三

もろ仕舞 扇子を二つ乃外ハ
もなし 第一第二ハ手拭 第三ハ
手拭 或ハ
ちらしもの 色々あり 鄭公 貞徳
かく乃てとり扱文字ハ功者乃もの初心の
ものハ 乃仕舞を謡ふ人
一月花定座

面八句ニ月七句月ハニ定座なれハ七句ニ
むこうとをへ
裏十四句九句月ハニ定座十三句め花ニ定座
二ノ面十四句十二句月ハニ定座色
二ノ裏同初折乃裏とおなし
三ノ面同二ノ面とおなし
三ノ裏同二ノ表とおなし
名残ノ面同三ノ面とおなし

十三

名残ノ裏八句月なし十七句目花ニ定座ハ
をゝひらきとなしこれ八句めの句ゟ月出座
也百韻之法月花ノ定座皆ニ初心古今ニ格式
記之

四十四句之法

是八百韻乃初折と名付
二ノ折三ノ折ぬきにして
折とをくるとこれ法ハ百韻の折
折とをくるなり

歌仙之法

面六句五句目月ヲ定ム

裏十二句七句目月ヲ定ム十一句め花の定也

名残ノ面十二句十一句目月の定也

名残ノ裏六句五句目月花ヲ定ム

以上三十六句也

千句之法式

千句ハ百句数十句ヲ四季ニ分ル

春ノ句三　夏ノ句二　妹ノ句三

冬ノ句二

又百句ヲ十ニ月ニ十ヲあてハめ

しくせんとてもよろしかるへし

ますまし四季ヲ分ル時ハ千句ニ

時ハなしひ有ハ句ヲ百ニ定ル

為ニ仕ル也

賦物作例

吏祇祐好城狗八字

人身なとゝ五ケ条もかきて八五番白を左に
何某とも無名字なとをかきて前ゝ通八さ
まゝゝを左に古人の作をそれ〳〵まく
事ゝ入よふをかくなり

何某

和花申月さま〳〵拉好朗

是八郭家ゝ事ゝ候ゝ五番白乃中郭と
字なを上ゝ左ゝ候ゝ也

解何

一なや日なるとく「行くよ
是ハ解花とそ句中の行字を不
まとしおそ言ふて上何下ゟ心なくて
へ
一字露（ロ）顕（ケン）

なけ一ゟ丸「庫なハ
是ハ庫を言とそ句ゟ中の無字を
十六

一つゟてゟ乃ゟ
を菓ゟ奈ゟ解
二字厄（ヘン）音（ナン）

說てゟそゟ
是ハ句中ゟぢ
音（ナン）をつゟ
三字下略

月ハ引ゟつ新ハ日数ゟ添ゟ

是ハ句中の字と字との間を略されたるなり　中略　上略四字上下略五字上中下略もあり　心得べきは略されたる字の数多くあれども推し知べし

一字借音（シヤクオン）

白雲ハ山乃額ゟ出る雲やうの気

是ハ句乃中ゟ其文字を略して其文字を色と借音（カルユヘナ）とをもて影訓（アラハスヨミナ）と名附（ナヅ）く　訓と音と味ひ知べし

二字除篇（ナヨヘン）

龍門ゟ出て群へ入の魚

是ハ句中の熟字の内ゟ篇を除けハ其字無し

或ハ杜ゟ篇を去れハ公ゟ余　明の字ゟ日を去るが如し

此方ゟ残へよりの名を風（フウ）と知べし

他添（タテン）又添（テンヘン）篇トモ

ゐやよむ哥にあるそね題目
是ハ句中に毎乃字を添へハ梅と松今
よ字よなるゝ
如此かゝる作よまこのせて名てのみ有
俳是ホハ子句方句ともに名なし
名ありてなきかごとく猶吟なるハ
是ハ城和の名やうも宗匠の名よりて
十八

ゐるもつゐにゆく又
貞徳云連哥ハ十ヶ七ヶ城和なるを誹諧
昌百韻なるゝ流をもつて城をる連歌なれハ猶
法ゆりをも誹諧之連歌と云へよく是ハ
猶四経文名号をもて連歌まの心をへし
一面保三年二月十七日於花咲亭定之
是よりハ矢徒の家流と城和なり
於席上時ゝ吟ずるよりハ

切字

そ。う。よ。ぬ。や。ゐ。ろ。は。に。ほ。へ。と。ち。り。ぬ。る。を。わ。か。よ。た。れ。そ。つ。ね。な。ら。む。う。ゐ。の。お。く。や。ま。け。ふ。こ。え。て。あ。さ。き。ゆ。め。み。し。ゑ。ひ。も。せ。す。ん。

不知とうえ式ハ花ゑ呑めり母ようなくなとりそ
おをいひつるやうおそ
かまりおる程切字なるこなるこ

三世おしーのらる。ちひー。誰ー
見ハをおくり切字こなる
みとも〻為ゝなり
逢ー。まー。ぬー。ゐー。の。く。や。ま。け。ふ。こ。え。て。あ。さ。き。ゆ。め。み。し。ゑ。ひ。も。せ。す。ん。

是ハ現在ニ切字ヲ使ヒタル
おもへバー。然ヌレバー。なれバー。みるー。
ねるバー
是ハ未来ニ切字ヲ用ヒタル
ぬ乃ず
ぬ
ぬハふの
ぬく
ぬる
ぬれ
ぬを
ぬハ
ぬハ
ぬハ

れ人ハ答ふらんなれ
云ぬ切昔々のる
月かろしこのつゝみやま
名にしおふ月かつらを折つゝん
は修ふ山もとのかなとい昆ゐ月の中ゐ
もみぢやとうそやとつゝいれはしてらんとハそなら
もみぢやらんそやらんとおぼして云ぬ
切と又

昔々やゞーゞ
きゝく

天尓遠葉并五義

みて昔おきく字のる

をたゞハもゐる

は五ゝ乃字をよきて云ふ又ハ
もとのまゝて云ふ如斯の虚字なる
つゝみ詞ハよろづおきく字なくても意

紅も白作りまよふ一ー！

よるこそと有時

けせでねへめれ

はもつおきを上ようおそん（ハこゝもと為つゝ

はたゝの字をゝ色の上ようおそん（ハこゝもと為つゝ

久色の海おそる

引くすつぬふむゐ

このゝ為りかハ為りまのそ

廿三

まよハぬ比の雲ハむこのハ

比句このもと為てハ引くん（このハなそ（ー

まよゝ子路の雲ハむこのも

比句かハみてそ（ー

上ヨ疑ひの文字ゝ為つてと為そ

かゝ字とゝおいゐかとやと又秀句そて

為そ也

下の句み為り

さ一おらんとするの
ひとりごと祇をも洩ぬらん
見ハ治をしてそねるく
治定乃かの一おるまい
夜のこ引月も今宵ハむう一みて
そこるてやのそさこやともやく
山乃端おぼ雲ありまをきて
そなるよ白といふこるの

前もまもそ後こをみへて
山なくて月ぞくてなと
有文年文とまるの宵文の白
雪遠し不士ほるまいよも見へ
年文の白
吹まさる風を砂弁て
弟正ら白とまるの
新もなよ水田の庵北あぬれて

下の五文字なくても句はまさしきやいかてなを
なをさらに
おもひて一句の仕やうによりてこころひさる
心乃句は初学者乃ために心法を説句は疑ひ
こそ詞をて作句をへ一年ぬふめぬて看
なをの句も大こそ心と句作りとハおほ一
こそ乃ち能く分るへ一こそを
ふぬけとも又こそぬけともやなり

下句
おすはり
はこそを主て句作りぬ是ハ上の句ハ時なり
下ハ句ハ時ハ主こそを不及上の句ハ先
せめてもし
ハ
はこそをを主て句作り
下ハ句中のこそ

風を汲て舞ふ袖
ゆふおきのそら
姫ゆ袂て葬の
かくのごとくなり匂ひ
ゆ紙ひろをいひて
袂を袂て葬将を
ゆて悪し
ひなひひろ八面八匂ひ内ゆハせぬるく

和歌ゆ五義ひり連歌八俳句を
ゆて祝詞をゆるゆとひるゆ
五義をいふハ

遍序題曲流

お月やくくハ山のかとくん
おかつなくも峰ゆるる
狂句俳句連て漫ゆくなん

先師竹隠水先祠祇徳後日祇語古学之
家を建るの初より皆古人の教へを
信ずる建仰ぐ処徒宗門芭蕉翁八ふたつ
ともる仰れと二のれも一を空朗見え一を窮
みて同じう根乃月をのぞむる衆へし
ともの後学一なるとて拝ふるとく
のれも一是非己悟を省て
雑を厭ハさとの色をは
花

行し共包をそふる取捨を無
せんしてとくくし人生を信ずる
ハ非也一人ゟ取捨取捨ゟ
と初ハ一人一書ゟ取捨
を不二の室ゟと三世自在庵祇徳後書

誹諧語類終

祈古人乃名を称
するより初祖祇空ハ
ひもら祇の一字をもて
この古墳に傳ふ名を
とぞ

初祖祇空　艾角門人之始青流旧庭前石を切れ
て石霜庵ト云
后鄂敬雨為僧祇空ハ相根山住ス故ニ玉筒山人
ト傳享保十九年印本半時庵法ニ集乎叙序文ニ

宗祇法師古墳の傍ニ葬ス三逸居士
享保六年己丑四月廿三日七十一栄ヲ以テ卒ス
ここに於てそむ

二世祇徳　祇空門人之姫水光泊竹隠と称し
歸古学庵傳享保二十年印本誹諧句選
拾集三十三支の時ニ祇空追善ニ
ことよく宝暦四年甲戌十月廿五日五十三栄ヲ以テ
卒ス　祇徳院本誉來蔵居士　押上ヶ長行山
大雲寺ニ葬ス

祇空乃法を纂ひ生涯を風流に遊ぶ

三世祇徳　姓仲氏　號自在庵

安永八年己亥の冬九月朔日五十二歳にて卒す

鏡観院察誉祇貞居士　押上ヶ長行山　大雲寺　北水ス

水光旧の門人等しこの猶往の容と朱を染ひ

一まとゝ一五十年を忘ることなく

是ら法遠をいとなむ句ことを乞ふ女婦

千頃業既に九十有四峯となんなりぬよろこう

廿一

不肖ながらこう是ゝ代りて居士う弔りせんと思

ふて五十年のものこう一ゝ拙のつゝら朱

てとゝをとゝ書ひなるゝ自ら庵ゝ一つ

等の好りゝ是やよゝ句ゝなんとゝ

ゝて一ゝまのりなゝ居士幸

うゝ一文章ゝ綴りゝくなりぬれハ刈

影ゝを紙紙徳ゝ有のまゝゝ写して

是を其棺の傍ゝ交ゝ換てよくて杖柩

詠を希ひ来く朽さんてを
を待りやすまの八四世自在庵祇徳なり
維時文政十一年戊子歳妹九月朔日押上ノ
於大雲精舎採筆

門人双楊當流宗匠洲
回則ち頃ろ古
法せて、其四世とすまの時
祇徳よりを授ひまの
やうなもの

一萬井素粒

家の名を称せ
いとゝ
社のおもし